

営農ウィークリーNEWS

長岡京花菜部会 立毛品評会開催



目合わせ圃場で審査の基準を確認する審査員

平成31年2月5日、JA京都中央乙訓、海印寺管内で長岡京花菜部会の立毛品評会が行われ、長岡京市各地区から代表8圃場が出品されました。審査には、部会役員のほか京都乙訓農業改良普及センター、長岡京市役所、京果、JA担当者が当たりました。9月に台風、12月に乾きがありましたが、全体的には温暖で降雨も適当にあり、各圃場とも花菜の生育は順調でした。生育状況、圃場の管理状況、病害虫の発生状況などに基づく審査の結果、1位に西川誠司郎氏、2位が能勢昌哲氏、3位が小山泰弘氏となりました。市場評価の高いJA京都中央の花菜は、5月まで出荷が続きます。



出品されたのはすべて「花かんざし」で早生種は花盛り



朝露を抱く花菜

—TAC information—



花菜「小花枯死」



写真は、当JA特産「花菜」です。よく見ると蕾の一部が枯れてしまっています。

「小花枯死」と呼ばれる症状で、多肥や乾燥などが発生原因と考えられています。

米づくりに J A 京都中央のおすすめ肥料



「とれ太郎」 ケイ酸30%、苦土12%、リン酸6%、アルカリ分40%

☆ケイ酸はイネの根の活性を高め、葉の老化を防ぎ、葉を直立させ光合成量を増大させる効果があります。とれ太郎のケイ酸は吸収されやすい形態で、効率よく効きます。アルカリ度が高いので、微生物の活動が活発になり、有機物の分解が進みます。秋～冬期に早めに施用しましょう。10a当たり100kgが目安です。



「けい酸加里」 ケイ酸34%、加里20%、苦土4%、ホウ素0.1%

☆吸収されやすいケイ酸であり、かつ流亡しにくいいため、基肥でも追肥でもどちらでも効果があります。高温障害対策、日照不足対策の場合は、出穂35～45日前に施用します。基肥の場合10a当たり40～60kg、追肥の場合40kg。



「アツミン」 腐植酸 約50%、苦土3%

☆腐植酸とは、土壤中で微生物などを除いた土壌有機物のことで、細根の増加や根張りの充実が図れます。また、マイナス電荷に帯電しているため、プラスに帯電しているカリウム、マグネシウム、アンモニア態窒素などが保持でき、保肥力の向上が図れます。10a当たり30～40kgが目安です。



「石灰窒素」 窒素成分20%、アルカリ度55%

☆稲ワラの腐熟促進に効果があります。刈り取り後10a当たり10～20kgを施用しすき込みます。石灰窒素に含まれる窒素分と石灰のpH矯正効果により、微生物の活性が高まり、稲株の腐熟が進みます。特に稲株が残って根腐れしやすい水田にお勧めです。

腐熟の進んだ良質たい肥



「JA活緑」

☆剪定枝をビール糟等で発酵を促進させた使いやすいたい肥です。土壌の通気性、排水性、保肥力の向上に欠かせない材料です。土壌改良は安定した良品生産を実現します。10a当り100～200袋施用。40ℓ(約15kg)入り。フレコン、バラ売りもあります。